この組織ができるときに一番心配したのは、文と理が一緒になると、おのおの自分たちの文化に固執して、対立が起こるのではないかということでしたが、杞憂でした。むしろ、学環に集まった先生方は、自分たちの専門に閉じこもっているのではなく、異文化に接することを楽しんでいるように見えます。築きあげたものだけの安定志向ではなく、変化に魅力を感じ、いつも前向きで、一緒に考え歩こうという先生ばかりです。学生も同じです。新しいことに挑戦していこうとする気骨のある人の多い、良い組織になったと思いますね。

文理融合ということで、
新たに何か気づいたことはありますか？

――文理融合が学環・学府のキーワードの一つになっていますが、正直言って、1, 2年で融合するとはとても思えない。学環の中でそのキーワードを議論している時、佐倉先生が、「とりあえず重要なのは、文理融合ではなくて、文理越境なのではないか」と言ったのを聞いて、なるほどと思いましたね。2つが一緒になることではなくて、とりあえず、自分が相手の中に飛び込んでいくことが重要なのではないか。飛び込んでいくことで、今までと違った人間関係が生まれるというわけです。

極端な話をすれば、日本という社会にずっと閉じこもっていると、外国人はみな宇宙人なんですよね。しかし、実際に外国で暮らしてみれば、同じ人間だとわかります。でも、それは日本と外国が融合することではない。それでも、同じ人間だとわかることにより、一緒に何かできるかもしれないという期待がでてくる。

僕はそれが重要だと思うんです。学生も、「自分たちの研究も文理融合でなければいけないのでしょうか？」「どういうテーマなら、文理融合になるのですか？」と真剣な顔で聞いてきますが、最初から研究テーマが文理融合というのは難しい。それぞれの研究室で、その分野で、一流の研究をすることがまず大切。文理融合を、研究の条件として考える必要はありません。

しかし、学環には、文、理、美術系の人も

Number.ZERO
2002.冬

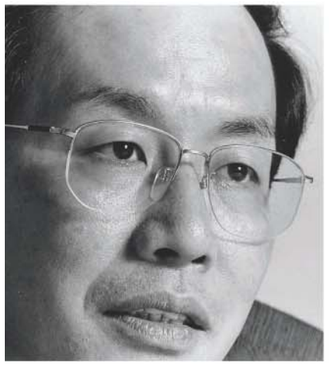
INTERFACULTY INITIATIVE IN INFORMATION STUDIES GRADUATE SCHOOL OF THE UNIVERSITY OF TOKYO

学環 学府

東京大学
大学院情報学環
学際情報学府

INTERVIEW

原島博情報学環長インタビュー



情報学環長に就任して半年以上が経った。情報学環は、7月に引越し、学環サロン（仮称）を開催、学外スペースも借りた、目に見えることだけでも、常に変りつつある情報学環をどう見ているのか聞いてみた。

情報学環・学際情報学府ができて3年目ですが、現状をどう見ていますか？

――情報学環・学際情報学府は、機が熟して組織ができたというよりも、むしろ未来を先取りする形でできたんです。だから、すべてが模索です。いつも現場にいて走りながらつくっている、常に変化しているところです。組織自体も、基幹教官に流動教官も加わって変化に対応できるようになってます。

この組織ができるときに一番心配したのは、文と理が一緒になると、おのおの自分たちの文化に固執して、対立が起こるのではないかということでしたが、杞憂でした。むしろ、学環に集まった先生方は、自分たちの専門に閉じこもっているのではなく、異文化に接することを楽しんでいるように見えます。築きあげた城を守るだけの安定志向ではなく、変化に魅力を感じ、いつも前向きで、一緒に考え歩こうという先生ばかりです。学生も同じです。新しいことに挑戦していこうとする気骨のある人の多い、良い組織になったと思いますね。

文理融合ということで、新たに何か気づいたことはありますか？

――文理融合が学環・学府のキーワードの一つになっていますが、正直言って、1、2年で融合するとはとても思えない。学環の中でそのキーワードを議論している時、佐倉先生が、「とりあえず重要なのは、文理融合ではなくて、文理越境なのではないか」と言ったのを聞いて、なるほどと思いましたね。2つが一緒になることではなくて、とりあえず、自分が相手の中に飛び込んでいくことが重要なのではないか。飛び込んでいくことで、今までと違った人間関係が生まれるというわけです。

極端な話をすれば、日本という社会にずっと閉じこもっていると、外国人はみな宇宙人なんですよね。しかし、実際に外国で暮らしてみれば、同じ人間だとわかります。でも、それは日本と外国が融合することではない。それでも、同じ人間だとわかることにより、一緒に何かできるかもしれないという期待がでてくる。

僕はそれが重要だと思うんです。学生も、「自分たちの研究も文理融合でなければ、いけないのでしょうか？」「どういうテーマなら、文理融合になるのですか？」と真剣な顔で聞いてきますが、最初から研究テーマが文理融合というのは難しい。それぞれの研究室で、その分野で、一流の研究をすることがまず大切。文理融合を、研究の条件として考える必要はありません。

しかし、学環には、文、理、美術系の人もいる、その人たちと付き合うことが、最初は目に見えないかもしれないけれど、どこかで影響してくるはずです。とりあえずは、それでいいのではないかな。

学環長になられて半年経ちますがいかがでしょうか？

――僕自身の基本テーマは、環づくりです。しかし、学問は環だけでは成り立つわけでなく、しっかりした深さも必要としていますから難しいですね。その意味で情報学環の先生方は大変だと思いますよ。新しい組織ですから、色々な環づくりの課題がある。そのなかで、それぞれの先生方が、自身の研究をしっかり深める時間をどのように確保していくか、その環境を整えることも学環長の役割だと思っています。

最近、大学への外からの要求にどう対応するか、このことに、ずいぶん時間を取られるように感じます。目に見える形の成果だけを要求されたり、評価のための報告書執筆にかなりの時間を費やさなければならなかったり、一番重要な教育研究をする時間を圧迫しているようで、おかしいですよね。これは大学全体の問題でもあって、このようなことばかりやってると、大学はダメになってしまいますよ。僕も、かなり忙しい毎日になっています。帰りの遅い日が続くと、家内がよく「このままだと、じきに倒れちゃうわよ」と言うんだけれど、夢をもって仕事をしていれば不思議と疲れは溜まらない。その意味では、学環長の仕事は大丈夫ですよ。それに、僕は忙しいときこそ、目の前のことではなく、長い目で見たときに重要なことを優先させるようにしていますから。たとえば、一杯飲みながら将来の夢を共に語り合うとかね・・・。

TOPICS

学環サロン(仮称)始まる

情報学環ができて2年半、キャンパス・建物が分散していることもあり、研究室を越えて教官と学生、学生同士、あるいは教官同士が顔を合わせ話す機会が、多いとは言えない。7月に本郷キャンパス最南端に引っ越し、新しくなった大学院生室が「たまり場」となっている様子もない。そういう事情をふまえ、学環内、将来的には学外者も含めた交流の場、「学環サロン」が10月18日(金)から始まった。

何ヶ月も前から構想はあったものの、決定は開催日2日前。"突発的"に開かれたにもかかわらず、20名ほどが集まった第1回目は、原島博教授が、「情報と空間のデザイン」をテーマに、I-mirror, I-wall, I-trace, I-shadowなど、壁、地面など公共の場を使って、新たなコミュニケーションの方法を探る研究について語り、参加した教官、学生と時間を過ぎてもディスカッションが続いた。

馬場章助教授が、「大井町プロジェクト」を紹介した第2回目。大井町のカルチャーセンターで講師をしていたことがきっかけで、プロジェクトが始まった経緯、「東大にかきまわされるんじゃないのか?」という関係者の不安を解消するために、毎晩、膝を突き合わせ飲みかわしたエピソード、ウェブが11月下旬に立ち上がり、12月初旬には写真展も開催、行政の政策ではなく、地元の人たち自らが、大井町を活性化していこうとしている日々の活動、「街づくりのモデルケース」を最終目標にかかげ、調査、研究、実践を行っていることなどを語った。

この集まりは毎月1回、金曜日夜に開催。堅苦しい講演会ではなく、飲み物片手にリラックスした雰囲気で、さまざまな分野の話に触れるよい機会。ぜひ、ご参加を。

学外スペース決まる

情報学環・学際情報学府ができて3年目、創立以来、教官、学生共に、頭を悩ませていたのが、「場所」のことだった。情報学環暫定建物に引っ越して、以前より広くはなったが、研究プロジェクトを行うためのスペースは、人が集まる場所さえない。その悩みを解消するために、本郷三丁目交差点近くのビルの4階に部屋(117m²)を借り、プロジェクトを中心に利用することが決定。募集に応じた、4つのプロジェクト、「ヒトの初期発達と身体ー環境系情報プロジェクト」(佐々木正人教授)、「メルプロジェクト」(水越伸助教授、山内祐平助教授)、「大井町プロジェクト」(馬場章助教授)、「e-learningプロジェクト」(山内祐平助教授)と企画室(室長 荒川忠一教授)が、12月初旬よりそこで活動している。

噂によれば、部屋の窓は広く、眺めよし、特に夜景はきれいで、ロマンチックに人生と夢を語りたくなる雰囲気だそうだ。

学環サロン第2回目、「大井町プロジェクト」の紹介をする馬場章助教授。りんかい線全線開通記念行事の一つ「大井フェスタ」では、地元の人々と共に、昭和30年代中心の大井町周辺の写真展を開催した。手にあるのは、「大井町」銘柄の日本酒。

風車と情報学環

東京大学大学院情報学環教授　荒川忠一

風車と情報学環、どんな関係があるのかと、疑問を抱く人も多いかもしれない。単に風車をエネルギー機械と考えてしまうと、工学の世界で閉じてしまう研究対象である。しかし、風車はいろいろな情報が溢れる社会の中で、呼吸しながら成長しつつある。世界規模では風車が毎年30%の割合で増え続け、設備容量は2,700万kWとなり、これは原子力発電のおよそ27基に相当している。遅ればせながら、国内でも北海道・東北を中心として30万kWに達するようになってきた。これらの風車の新しい潮流を紹介しながら、情報との関わりについて議論を深めていきたい。

風車はデザイン性を求められている

発電に用いられる風車は大型化が進み、現在の標準的なものは出力1000kW、その回転翼の直径はおよそ50mであり、タワーを含めた高さは80mにも達する。さらに、ウィンドファームと呼ばれているように、数十台の大型風車を配置することも多くなってきた。このような大型構造物は、それぞれの地域の景観を特徴付けるものとなる。写真1はコペンハーゲン沖合に昨年出現した、20 台の大型風車の配置を工夫した洋上風車である。従来の設計なら風車群を単純に直線で配置してしまうものであるが、ここでは円弧状に配置するデザインを採用した。不思議なことに、観察する地点によってその配置の妙からウィンドファームの表情が刻々と変化し、厭きさせることがない。デザイナーが何種類かの配置を提案し、住民の投票によって選ばれたデザインだけの価値はあると感心している。

また、風車とアートの融合を図ろうという試みが、ハノーバー万博にちなんで開催された。大型風車の性能を邪魔することがないとの条件で、アーティストたちが提案した作品の中から3種類の風車が建設された。写真2は「風の妖精」と呼ばれる作品で、40個のおよそ直径2mの円形ライトがタワーに取り付けられ、風速に対応した強さで発光するものである。ライトの色は3原色およびその補色で構成されているため、あたかも風車が光の拡散したスペクトルをつくりだしているかのように見える仕掛けになっている。このように、風車は単なるエネルギー機械ではなく、その地域の景観や文化を表現するツールともなっている。

お台場に風車建設

現在、東京都のお台場地域に風車を建設するプロジェクトが進行している。研究室の大学院学生が、研究成果をもとに「東京湾に風がある、風車を中心とした環境公園を創ろう。」と石原知事の前でスピーチを行ったことに端を発している。来年3 月には、お台場南側の埋立地に、23区としては初めての大型風車2台が稼動することになっている。電力会社に売電するのみならず、都会型の風車としてライトアップし、環境教育や都民のメッセージを伝える役割を果たす。幸いにも、羽田空港への航空路の真下にもあたり、そのメッセージ性を遺憾なく発揮することが期待されている。

お台場地域南側には、さらに広大な埋立地域と海が広がっている。筆者らは、東京という大都会と、エネルギー・環境の源泉である海を結びつけた風車プロジェクトを展開している。つまり、埋立地には「風車を中心とした環境公園」を、海には10MWを目指した超大型風車の研究開発、そしてデザイン性の優れた東京らしい風車の提案を目指している。

図1は環境公園を想定してデザインした「風のベンチ」であり、風が弱いときには風車の真下にあるベンチに座り、思索にふけったりすることも考えられる。図2は海岸に設置することを想定したものであり、防風林である松の幹の曲線をモチーフにしている。このようなデザインを総称して「ヴァナキュラー風車」と命名している。東京あるいはそれぞれの街にふさわしい風車のデザインは何なのかということを、工学のみならず、情報というキーワードをもとに文化、社会などの様々な観点から議論し、創作していきたいと意気込んでいる。風車の未来を一緒に考えようではありませんか。

図1 風車を中心とした環境公園にふさわしい「風のベンチ」

図2 海岸地域を想定したヴァナキュラー風車の一例（尾登誠一氏、鄭康和氏による作品）

写真1 円弧状に配置されたコペンハーゲン沖の洋上風車

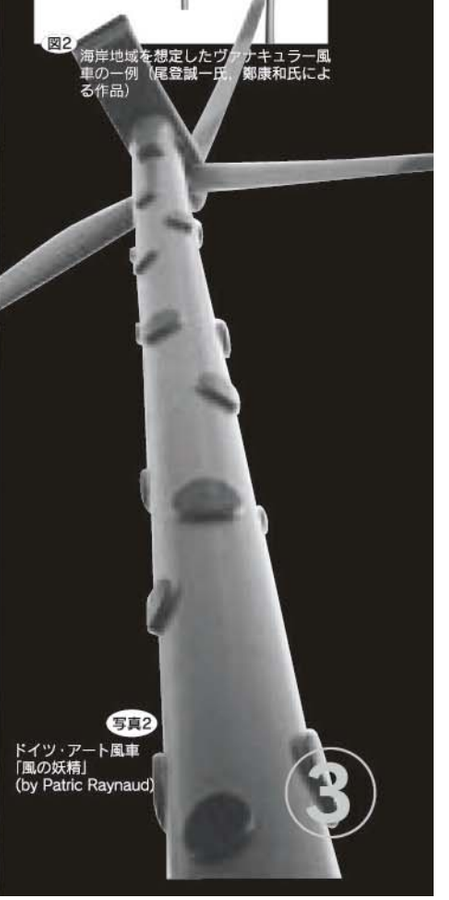


写真2 ドイツ・アート風車「風の妖精」(by Patric Raynaud)

NEWS

2002 NUMBER.ZERO

「学環・学府」は、情報学環の日々の活動を、より多くの方に知っていただくものです。企画室では、研究室の活動報告、イベント予定など、あらゆる情報をお待ちしています！

田中純助教授 第24回サントリー学芸賞受賞

田中純助教授が著書「アビ・ヴァールブルク　記憶の迷宮」（青土社）で、第24回サントリー学芸賞（思想・歴史部門）を受賞した。この賞は、毎年、前年１月以降に出版された日本語の著作を対象に、「政治・経済」、「芸術・文学」、「社会・風俗」、「思想・歴史」の4つの部門で、各選考委員より優れた作品が推薦され、選考委員会の審議を受け決定。選考には、独創的で、将来有望な研究者、評論家であること、候補作品だけでなく、一連の著作活動の業績も考慮される。

松村誠一郎氏（荒川研究室博士1年） 2002年アジアデジタルアート大賞 インタラクティブアート部門大賞受賞

松村誠一郎氏（博士１年　荒川研究室）は、鈴木太朗氏（東京藝術大学博士１年）との共同制作で、水中の気泡の運動をメディアアートに取込み、インタラクティブな機能を有するインスタレーションを発表している。二次元の水のキャンバスに描く作品 "Water Canvas with Ears" (2001年)は2002年第5回文化庁メディア芸術祭インタラクティブアート部門審査委員会推薦作品に選出され、引き続き制作された三次元の作品 "Liquid Sculpture" (2002年)は、2002年アジアデジタルアート大賞インタラクティブアート部門の大賞、2002年waSABI GRAND Prix waSABI芸術賞（インタラクティブアート部門）を受賞した。

中村直行氏（須藤研究室 博士１年） 理事長のNPOがNPOアワード受賞

中村直行氏（博士１年須藤研究室）が理事長をしているNPO救命促進情報センターが、社団法人東京青年会議所主催の「NPOアワード2002」で入選した。これは、実質的に活動しているNPO法人のうち180法人が応募しベスト10に選ばれたもの。また、大阪NPOセンター主催（大阪府・大阪市後援）の「NPOアワード2002」でも入選。NPO救命促進情報センターは、医療情報提供、医師による治療コンサルティング、FAX情報提供などを行っている。

URL　http://www.qmei.jp/

同氏は、社会情報学会全国大会（9月）において、優秀修士論文賞も受賞。

情報リテラシー論で作成されたワークショップがNHKで紹介

学際情報学府の授業、情報リテラシー論では、大学院生が情報やメディアのリテラシーに関わる授業やワークショップをデザインし、教育現場で実践を行う試みを続けている。

本年度の実践は、11月1日付け朝日新聞朝刊家庭面に掲載されたほか、ウェブサイト毎日インタラクティブにも掲載。

URL http://www.mainichi.co.jp/digital/e-learning/new/topics/200210/13-1.html

また、作成されたワークショップの一つがNHKで紹介される。

「NHK・民放連共同企画　メディアと子ども湯けむり事件の謎～取材シミュレーションゲームに挑戦～」

12月28日(土)午前11:00～11:44
NHK教育テレビ

問い合わせ先　山内祐平助教授
e-mail:yamauchi@iii.u-tokyo.ac.jp

e-learningサイト iii online　好評配信中

大学院情報学環は、この4月より、メディア教育開発センターと協同でe-learningサイト iii onlineを立ち上げ、実験的に授業の配信を行っている。前期だけで、のべ2万人を越える方に利用いただき、好評を得ている。現在配信を行っているのは以下の4授業。ゲストユーザーにも多くの映像が見られるようになっているので、ぜひアクセスしてみて下さい。

自然言語処理論――辻井潤一教授
コミュニケーションシステム――原島博教授
情報政策論――濱田純一教授
メディア表現論――水越伸助教授

URL http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/online/

問い合わせ先　山内祐平助教授
e-mail:yamauchi@iii.u-tokyo.ac.jp

Asia E-learning Network Project　始動

大学院情報学環は、本年度、経済産業省のe-Japanプロジェクトの Asia E-learning Networkに参加し、シンガポールにあるNanyang Technological University と協同で、電子経済、電子政府などについて包括的に学べる国際遠隔協同学習プロジェクトを展開している。須藤修教授、Nanyang Business SchoolのLee Gilbert助教授がコンテンツを、教材および教育プログラムの設計を山内祐平助教授が担当。また、数名の学府の大学院生もプロジェクトで活躍。

URL　http://aen.iii.u-tokyo.ac.jp/index.html

問い合わせ先　山内祐平助教授
e-mail:yamauchi@iii.u-tokyo.ac.jp

広目天像のデジタルデータ化成功

今年の夏、文化財をデジタル保存する研究を行っている池内研究室が、国宝・東大寺戒壇堂四天王像の１つ、広目天像のデジタル化に成功した。本像は奈良国立博物館で開催された東大寺特別展にて、17年ぶりに東大寺外へ出展。その機会を利用して、池内克史教授とメンバーが、この像をレーザー測定し、実物との誤差１ミリ以下のデジタルモデルを生成した。今回は、430万画素のデジタルカメラを使い、色彩も再現された。

SciPOP

（=Science Popularization Project; 科学普及プロジェクト）

佐倉統助教授、山内祐平助教授、植田一博助教授、日本科学未来館三石祥子氏との共同プロジェクト。日産科学技術振興財団からの研究助成金で、科学知識をわかりやすく提示するためのノウハウや理念、科学館・博物館の社会的意義、各国科学館の比較研究などを行う。平成14年12月から科学未来館・メディアグループリーダーの境真理子氏を学環の客員研究員に招き、未来館と学環の組織間連携もすすめる予定。また、科学ジャーナリズム研究も視野に入れ、アカデミズムとジャーナリズムの健全な相互交流体制も模索していく。

学際越境人のリレー講義

（佐倉統助教授）

佐倉統助教授の今年度冬学期講義（水曜3限）では、成功している「越境人」に講義をしていただき、ノウハウを学ぼうという試みが試験的に行われている。これは、異分野越境や学際研究が、情報学環・学際情報学府のキーワードだが、理念や進め方が噛み合わず、うまくいかないのが現状で、異分野越境そのものについて研究する必要性を感じたため。

11月20日には、彫刻家の高田洋一氏が、実作品やビデオを交えて講義し、アート系の学生から、いい刺激になったとの感想も。以後、建築家の内藤廣氏（東大工学研究科助教授）（11月27日）小説家の瀬名秀明氏(12月20日)と続き、評論家の荒俣宏氏の講義も予定している。この講義は、履修していない学生、興味のある教官も参加できる。日程はメールにて連絡するとのこと。

NHKスペシャルと連動した「変革の世紀」フォーラムの展開中

2002年4月から12月まで、インターネットと放送の新しい関係性を実践的に模索するため、NHKスペシャル「シリーズ・変革の世紀」のウェブサイトの企画、編集に参画する共同プロジェクト、「変革の世紀」フォーラムが展開されている。これは、水越伸助教授、佐倉統助教授、山内祐平助教授、関心のある院生たちの他、学内外の研究者やジャーナリスト約10名からなる混成チームで行い、このメンバーが中心となって編集した本「変革の世紀1：市民・組織・英知」（NHK出版）も刊行された。

このフォーラムのウェブサイトでは、さまざまな形で発言の場が用意されているので、興味のある方は、ぜひ議論にご参加を。

URL　http://www.nhk.or.jp/henkaku/

(2002年内中書き込み可)

「変革の世紀」シリーズ再放送予定
第1回「国家を超える市民パワー」
12月24日（火）午前0:30～1:19
第2回「情報革命が組織を変える」
12月25日（水）午前0:15～1:04
第3回「知は誰のものか」
12月26日（木）午前0:15～1:04
第4回「見えない脅威」
12月27日（金）午前0:15～1:04
第5回「社会を変える新たな主役」
12月28日（土）午前0:15～1:04

問い合わせ先　水越伸助教授
e-mail: shin@iii.u-tokyo.ac.jp

メルプロジェクトから公開研究会のお知らせ

子供、市民のメディア表現、メディアリテラシーについての実践的共同研究プロジェクトのメルプロジェクト（総括：水越伸助教授、山内祐平助教授）では、月１回程度、関心のある方々にも、公開する研究会を開催。内容は、メルプロジェクトの研究活動報告とディスカッション。参加希望の方はテーマ、場所等、水越助教授、山内助教授に確認を。

「メディア表現研究の展望」
1月11日（土）

「HIT!（会議の情報デザイン・プロジェクト）報告会」
2月8日（土）
時間：午後3:00～5:00
場所：情報学環暫定建物二階会議室（予定）

問合わせ先　水越伸助教授
e-mail: shin@iii.u-tokyo.ac.jp
山内祐平助教授
e-mail:yamauchi@iii.u-tokyo.ac.jp

編集/発行
東京大学大学院情報学環・学際情報学府　企画室
〒113-0033　東京都文京区本郷7-3-1
e-mail:news@iii.u-tokyo.ac.jp　URL:http://www.iii.u-tokyo.ac.jp